3時点の連続立面写真を触媒とした住民のまちに対する語りの構造 －郡上八幡を対象として－

1X19D015-3　太田恭平*

まちづくりを考える上で，住民のまちに対するイメージの把握とそのための方法は重要である．本研究では，住民によるまちへの語りに注目し，町並みとその変化を直覚できる3時点の連続立面写真を用いたインタビュー実験によって語りの構造を明らかにする．得られた語りのコード化と分析から，語りの対象となる場所の特性，語り手の類型を得た．さらに語りのつながりを図化することによって，提示した3時点連続立面写真が触媒となって，主体は対象や内容を変化させながら，創発的なプロセスを経てまちを語ることを示した．

Key Words：語り，地域認識，町並み，連続立面写真，郡上八幡

1. 序論

(1) 研究の背景・目的

景観計画やまちづくりを考える上では常に意味的なアプローチを欠かしてはならない[1]．その中でも，人々が風景，あるいは地域に対して抱くイメージを把握することは重要な意味を持つ．

主体の内面に生じる認識を捉えるためには，それが外部に表出する際の，主体の「語り」について理解する必要がある．研究対象地に暮らす住民から地域に関する「語り」を引き出すため，過去の写真や地図といったモノ，あるいはワークショップなどの場を利用した研究はすでに例がある[2][3]．

写真や地図というモノを提示された際，それ自体が有する情報に対する評価や付帯的な情報だけでなく，語る中で想起されたことが様々に展開してくことがある．その意味で，語りの場に提示されるモノは「触媒」とみなすことができ，まちに関する情報を得る以上に主体がまちを如何に捉えているかに注目するためには，「触媒」となる媒体が重要となる．

本研究では，複数時点での連続したまちなみの写真を語りの「触媒」として活用することを考えた．これは岐阜県郡上市八幡町の中心市街地の3時点のファサード写真を用いて作成したものであり，佐々木[4]によれば住民へ公開した際に様々な語りが得られたことを確認している．そのため，これを「3時点の連続立面写真」という媒体として精査し，語りの条件を整えた実験としてデータを得ることによって，語りの特徴と構造を把握することとした．

以上より本研究では地域まちづくりにおける基本的な配慮事項として主体がまちに抱く認識を位置付け，その認識が表出する際の「語り」の構造を把握することを目的とする．そのために，「語り」の触媒として3時点の連続立面写真を用いたインタビュー実験を行い，得られた「語り」のテキストデータの分析によって，「語り」の対象と内容および一連の「語り」が生成されるプロセスの特性を明らかにする．

(2) 既存研究の整理と本研究の位置づけ

地域認識に関する既存研究は前述の通り数多く存在するが，その多くが景観評価を軸にした分析で，ある特定のイメージとして語られたものを対象にしている[5]．そうしたイメージが生成する過程に注目した研究は萩下ら[6]や尾野ら[7]の研究があるが，いずれも初めからテキスト形式のデータを対象としている．呉[8]の研究は口述データを対象としているが，複数の主体間での共通性についての分析がない．

本研究は，主体から得られる語りを特定のイメージに限定せずに収集することで，主体の中で発言が生成されていく過程を含め分析対象とする点，また複数の被験者から同様のデータを得ることで，主体間の共通性も考察する点に新規性がある．

また住民から語りを得るための触媒として，ある一時点，ある地点の写真を用いた既存研究は増田[9]の研究などがあるが，複数の時点における連続した立面写真を使用した研究は管見の限り存在しない．

*早稲田大学創造理工学部社会環境工学科 景観・デザイン 佐々木葉研究室 学部4年

2. 研究対象地の概要

(1) 対象地の特徴

岐阜県郡上市八幡町（以下，「郡上八幡」とする）は岐阜県のほぼ中央に位置する町で，面積は約242km^2，人口は約12,500人である[10]．郡上踊りや，水環境，一部が重伝建地区の指定を受けている伝統的町並みなどを資源としたまちづくりと，それらをもとにした観光産業が発達している．

対象とするのはその中の「新町」「今町」と呼ばれる地区で，行政によって商業活動の重要拠点として「中核的商業エリア」と位置付けられている[11]．重伝建地区の選定は受けておらず，歴史的な町家や近代的なRC造の建物が混在するが，家田[12]によれば，1999年の調査開始以降，景観条例や町民協定の制定も後押しし，より伝統的な意匠，素材や配色へ改修される建物が確認されている．また，街なみ環境整備事業により道路の美装化が行われるなど，公共空間においても景観に配慮した整備が見られる．

(2) 対象地の選定理由

上記のように，新町・今町では全体的に高い景観意識が保たれながら町並みの更新が続いており，立面写真において時点間の変化がわかりやすく，さらに建物が密集していることから，空間的連続性も把握しやすい．さらに中心商店街であることから多くの住民にとって馴染みがある場所と考えられる．以上の理由から，立面写真を用いた際により多くの語りが被験者に生まれることが期待されるため，対象地として選定した．

3. 実験方法と結果の集計

(1) 3時点の連続立面写真の作成と実験の実施

まず，3時点の連続立面写真を作成した．新町・今町の建物および空地について，1999年（日本福祉大学佐々木葉研究室撮影），2010年，2020年（各早稲田大学佐々木葉研究室撮影）の3時点分の写真を用いた．これらの写真を補正の上，通りの北面，南面それぞれについて，実際の建物・空地の配列と一致するように横に連続してつなげ，3時点分を縦に並べて配置した．作成したデータを，北面，南面について，各縦55cm×横320cmのサイズでカラー印刷した．

作成した図を用いて，**表-1**に示す通りインタビューを伴う実験を行った．また，被験者の属性を**表-2**に示した．なお，実験中はICレコーダーによる録音に加え，デジタルカメラを三脚に固定し実験の様子の録画も行った．

(2) インタビューデータの切片化

被験者の発言をテキスト化し，発言が途切れる，または後述するコード内容が切り替わるまでを1チャンクとして切片化した．切片化の際は，発話が途切れる，または後述する「対象」または「内容」が切り替わるまでを1チャンクとして「発言データ」とした．このうち，発言自体に意味の持たない相槌等を除外し，全11被験者より1,352件の有効データを得た．

表-1 実験の概要

実験日	2022年11月4日～12月10日
対象者	郡上八幡の住民・元住民11名
手順	① 調査の目的と全体手順を説明する． ② 3時点連続立面図を被験者に観察させる． ③ 観察した上で被験者が思いついた話題を，テーマを限定せず自由に語らせる． ④ 調査者側から，半構造化インタビューを行う． ⑤ 選択式の紙面アンケートに回答させる．

表-2 被験者の属性

No.	年代	郡上八幡在住通算年数	U/Iターン
01	20代男性	2年以下	Iターン
02	40代女性	31～40年	Uターン
03	20代女性	2年以下	Iターン
04	20代男性	21～30年	Uターン
05	40代女性	31～40年	Uターン
06	50代男性	11～20年	＊
07	20代女性	2年以下	Iターン
08	20代女性	2年以下	Iターン
09	60代女性	51～60年	Uターン
10	60代男性	61～70年	Uターン
11	40代女性	6～10年	Iターン

＊過去に郡上八幡にお住まいで，現在は不定期で滞在している

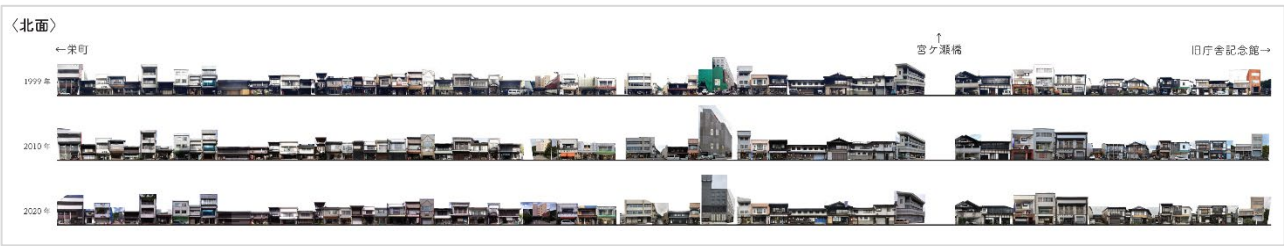

図-1 作成した3時点の連続立面写真（北面）

(3)　発言データのコーディング

有効データ 1,352 件を，**表-3** に従って 1 チャンクに発言の対象と内容の組み合わせが 1 組対応するようにコーディングし，その集計結果を**図-2** に示す．

発言の対象の構成比を見ると，「人・店舗」「モノ」「空間」の順に件数が多く，極端な数の偏りはなかった．同様に発言の内容は，「説明的認識」が半数弱を占めており最も多く，「印象的認識」「発見的認識」「経験的認識」と続いた．一方，そうした経験・知識・印象を踏まえた上での高次な語りとしての「課題的認識」はほとんど確認できなかった．

表-3 発言の分類コード一覧

発言の対象による分類コード一覧	
A モノ	A1 特定建物・空地
	A2 不特定建物・空地
	A3 建物の付属物
	A4 その他モノ
B 空間	B1 新町・今町全体
	B2 その他地区（郡上八幡内）
	B3 郡上八幡全体
	B4 その他地域（郡上八幡外）
C 人・店舗	C1 特定住民・店舗個人
	C2 不特定住民・店舗個人
	C3 住民全体
	C4 訪問者
	C5 行政
	C6 被験者自身
	C7 その他人
D 実験・実験者	
発言の内容による分類コード一覧	
a 発見的認識	a1 現在の状態
	a2 過去の状態
	a3 変化
	a4 継続
	a5 質問
b 経験的認識	b1 現在
	b2 過去
c 説明的認識	c1 現在の状態
	c2 過去の状態
	c3 知識・一般論
d 印象的認識	d1 好印象
	d2 悪印象
	d3 単純印象
	d4 興味
	d5 現在の状態の推測
	d6 過去の状態の推測
e 課題的認識	e1 意思
	e2 提案・要望

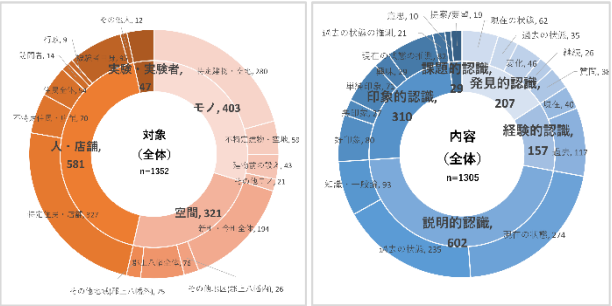

図-2 コーディング結果の集計

4. 発言データの分析

(1)　発言データの全体的傾向

有効データ 1,305 件[補注 1]に対する，対象と内容の集計結果のマトリクスを**表-3** に示す．

表から，特定住民や店舗に対しての説明や過去の経験の語りが多く見られることがわかる．また，特定の建物や空地に対しては，同様に説明や経験のほか，現在の状態や変化に対しての発見も多く見られる．特に変化に対しての発見は，写真が 3 時点分並んでいることにより得られた発言と考えられる．

また，新町・今町全体に対する単純印象も多く見られるが，これは立面写真を引いた視点で観察することにより，全体的な色彩や高さの統一感や空地の少なさといった部分への印象についての発言が得られたものと考えられる．

(2)　言及された場所に注目した分析

(1)と同様の 1,305 件のうち，対象エリア内の特定建物・空地が言及されている発言 506 件に場所コードを与え，各地点の出現回数を集計した上で地図上にグラデーション表示した（**図-3**）．図より，対象エリア内で幅広い場所が言及されていることがわかる．

上位 5 件は，IS29（飲食店・14 件），SS03（複合施設・13 件），SS01（雑貨店・12 件），SN08（金融機関・11 件），IS24（飲食店・10 件）であった．IS29, SS03, SS01 の 3 か所はいずれも 2010 年から 2020 年の間に空き家等を改装し新規開店した店舗である．IS24 は老舗飲食店が近年一度閉業し 2022 年に改装の上営業再開した店舗で，SN08 は現在建て替え工事中の金融機関である．いずれも，近年外観や営業形態に大きな変化があった場所であることがわかる．

表-4 対象と内容のマトリクス表

			対象														
			モノ				空間				人・店舗						
			特定建物・空地	不特定建物・空地	建物の付属物	その他モノ・電柱・電線	新町・今町全体	その他地区（郡上八幡内）	郡上八幡全体	その他地域（郡上八幡外）	特定住民・店舗	不特定住民・店舗	住民全体	訪問者	行政	被験者自身	その他人
内容	発見的認識	現在の状態	26	2	1	0	13	0	3	0	11	1	2	0	0	3	0
		過去の状態	21	1	1	3	0	0	0	0	9	0	0	0	0	0	0
		変化	22	4	6	0	7	0	0	0	5	2	0	0	0	0	0
		継続	14	0	0	0	12	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
		質問	21	2	0	1	0	0	0	0	14	0	0	0	0	0	0
	経験的認識	現在	7	4	0	0	12	0	0	0	10	6	1	0	0	0	0
		過去	22	5	4	4	14	0	1	2	55	3	1	5	0	1	0
	説明的認識	現在の状態	43	9	3	0	33	10	22	8	62	15	15	3	0	50	1
		過去の状態	48	0	17	1	12	7	10	1	100	3	2	0	3	28	2
		知識・一般論	2	8	3	8	8	3	8	9	10	14	18	0	0	2	3
	印象的認識	好印象	14	2	2	1	18	0	8	0	21	3	9	0	1	0	0
		悪印象	10	4	0	1	3	0	3	0	2	0	0	2	0	2	0
		単純印象	9	3	3	0	22	3	8	2	10	3	4	1	0	2	1
		興味	3	4	2	0	7	0	3	0	5	4	0	0	0	0	1
		現在の状態の推測	10	5	1	1	17	3	9	2	7	14	3	3	2	2	3
		過去の状態の推測	7	1	0	1	7	0	0	1	3	1	0	0	0	0	0
	課題的認識	意思	1	1	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	0	4	1
		提案・要望	0	3	0	0	7	0	3	0	2	0	1	0	3	0	0

＊上位 10 項目を強調表示した

この 5 件に言及している発言について，内容ごとの件数を見ると，c2, c1, b2 の順で件数が多かった．いずれの場所も，なんらかの大きな変化により，過去の状態や現在の状態に対する発見，あるいはそこから想起される過去の経験や知識をもとにした説明などの語りが発生しやすくなっていたと考えられる．

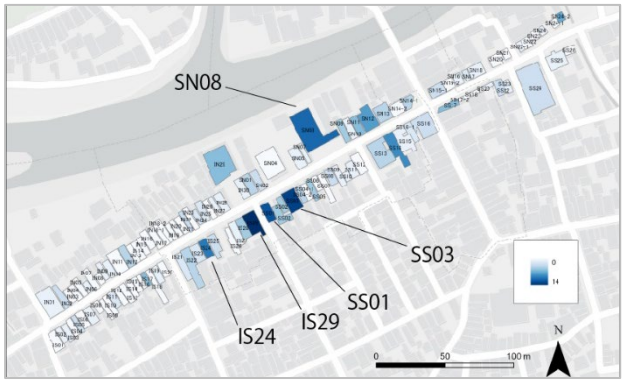

図-3 場所コードの登場回数の地図上表示

(3)　語り方による被験者の類型化と発言のつながりに注目した分析

以降の分析を簡便にするために，被験者ごとの発言における対象・内容の構成比を変数としたクラスター分析を行った結果，11 人の被験者を 4 つのクラスターに分類することができた．各クラスターにおける対象・内容構成比を**図-4** に示した．

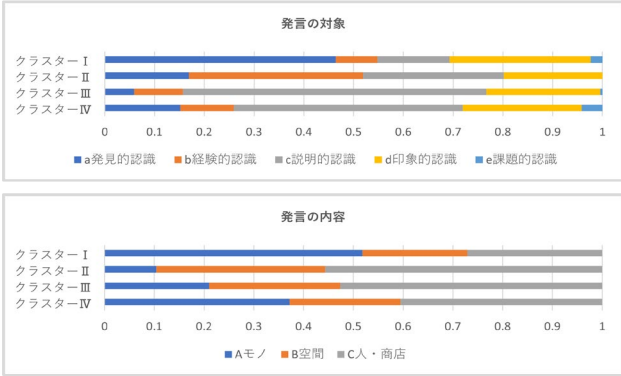

図-4 クラスターごとの発言の対象・内容構成比

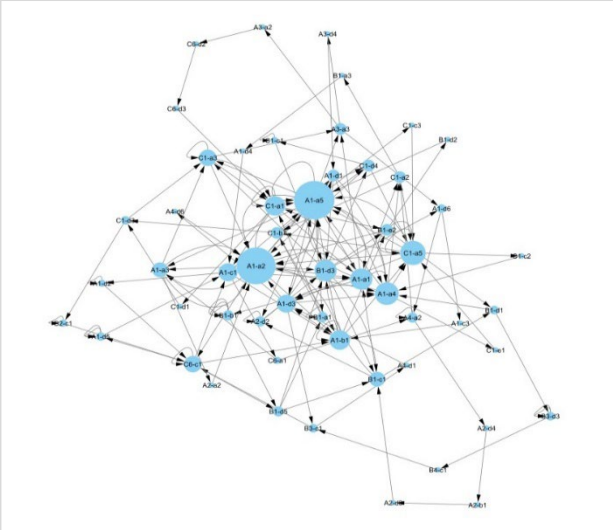

図-5 クラスターⅠのネットワーク図

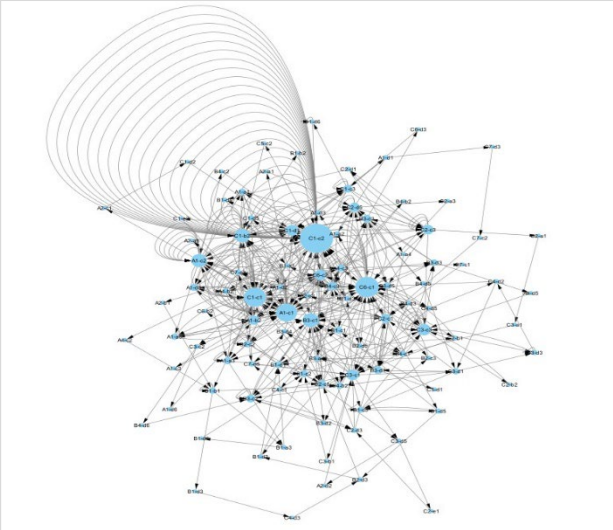

図-7 クラスターⅢのネットワーク図

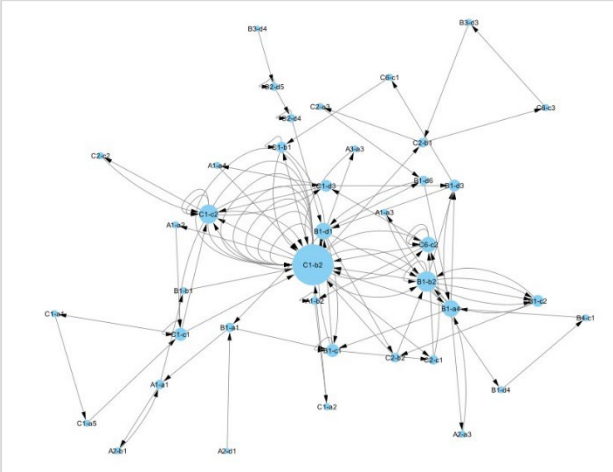

図-6 クラスターⅡのネットワーク図

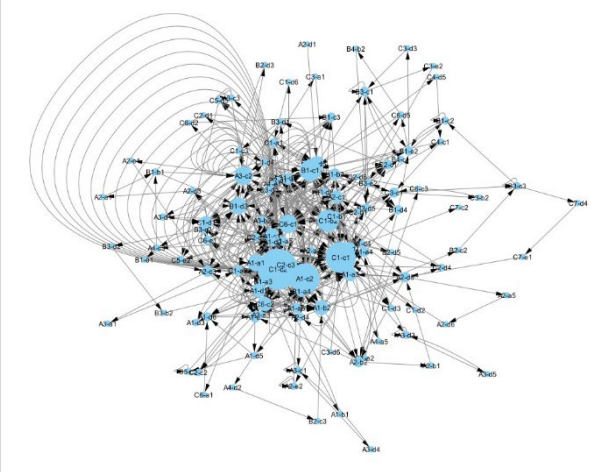

図-8 クラスターⅣのネットワーク図

各被験者の一連の語りを扱う際，ある発言に関連して，ある発言が新規に発生するというシークエンスを考慮する必要がある．そこで，各発言の対象－内容の組み合わせをノードとして，それがどのような前後関係で接続をしているか，クラスターごとに有向性ネットワーク図を描いて把握する(**図-5～8**)．

a）クラスターⅠ（被験者 01，03）

モノを対象にした発言，発見的認識が多い．主に建物の外観についての新しい発見や実験者へ問いかける発言が確認された．媒介中心性[補注 2]は A1-a2，A1-a5 が高く，個別建物への発見が，他の説明や印象といった語りのベースになっていることがわかる．

両者とも，郡上八幡在住歴が 2 年以下ということから，まちに関する知識が比較的薄く，主に新規の情報をもとに認識を得ていたと示唆される．

b）クラスターⅡ（被験者 04，07）

モノを対象にした発言割合が最も小さく，人・店舗を対象にした発言割合が最も大きい．さらに，経験的認識の割合が目立って大きいことも特徴である．媒介中心性は C1-b2 が単独で大きな値をとっており，個別の店舗や人との間の経験をもとに語りを展開させている様子がわかる．

両者ともに 20 代で，幼少期からまちでの記憶があるものの，一度郡上八幡を離れたのちに近年戻ったという共通点がある．被験者 07 の方が*「子供の時って印象的なお店しか覚えてないですよね」*と語った通り，幼少期に形成された断片的な経験・記憶がまちへの認識に大きな影響を与えていると考えられる．

c）クラスターⅢ（被験者 06，09，10）

対象に関しては比較的偏りがないが，発見的認識の割合が小さく説明的認識の割合が極端に大きい．媒介中心性は C6-c1，C1-c1 などで大きな値を取った．被験者自身や町内の個別店舗・人，郡上八幡全体に対する説明をもとに語りが展開されている．

3 者ともに 50 代以上であり，郡上八幡在住歴も長いため，多くの知識の蓄積をもとに，まちへの認識を生成していると推測される．

d）クラスターⅣ（被験者 02，05，08，11）

対象･内容とも割合に大きな偏りはない．一方で，課題的認識が占める割合が他クラスターに比べ大きい．媒介中心性は C1-c2，C1-c1，A1-c2，B1-c1，C6-c1 が大きな値を取っている．これもクラスターIIIと同様に，個別店舗・人や個別建物，新町・今町全体への説明をもとに語りが展開されている．

被験者 08 を除いた 3 名はいずれも自営業の 40 代女性で，町内の経済活動における中心世代である．ゆえに知識の蓄積も豊富なほか，他クラスターに比べまちの課題にも意識的であり，それらがまちへの認識に影響を与えていると考えられる．

5. 得られた語りの構造的解釈

4 章の分析を踏まえ，得られた語りの構造を把握するための図をクラスターごとに作成し，クラスターIの例を**図-9** に示した．これらをもとに，語りの構造について以下のように解釈を試みた．

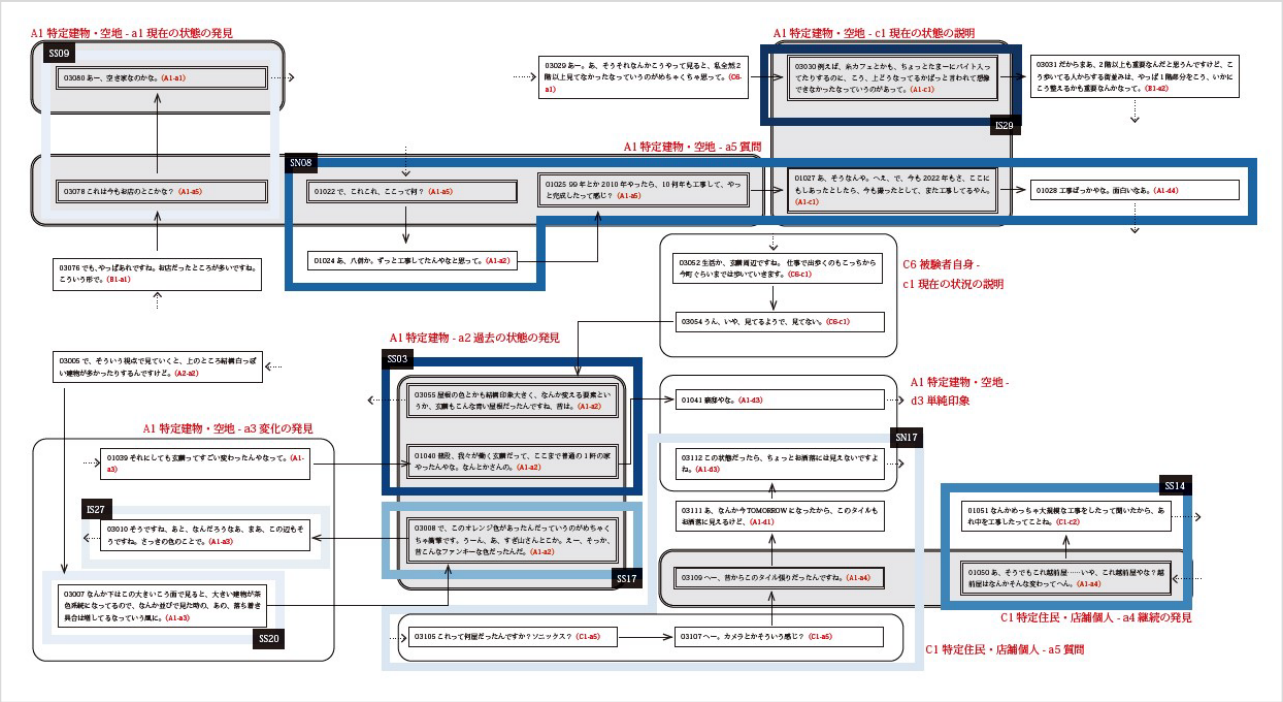

図-9 クラスターⅠにおける語りの構造図

a）ハブとなる発言のタイプ

各クラスターとも，ベースとなっている「対象－内容」の組み合わせや，その前後における発言の連関の仕方に被験者間の共通点が見られることがわかった．さらに，各クラスターにおいて確認される語りの型や，その型の中でハブとして認められる発言のタイプは，そのクラスターに属する人にとって，まちを語り，認識する際の重要なポイントになっていることが示唆された．

b）発言の創発的プロセスによる生成

ある「対象－内容」の組み合わせが，異なる「対象－内容」の組み合わせにつながっている様子を詳しく見ると，一連の語りの流れを被験者は予定していたわけではなく，創発的に言葉を紡いだ結果として語りが形成されたということがわかった．

c）発言の対象・内容の拡大縮小

b)と同様に発言のつながりに注目すると，一連の語りの中で，対象の範囲が個人のレベルからまち全体といった空間のレベルまで拡大・縮小を繰り返している．また内容に目を向けると，発見した内容の同定に留まるものから今後の課題を考察するものまで具体化・抽象化を繰り返していることがわかる．

6. 結論

(1) 本研究の結論

まず，3 時点の連続立面写真を触媒として住民によるまちへの語りを得ることができた（3 章）．

個々の発言を対象－内容の組み合わせで分類し，その全体的な傾向を把握した（4 章(1)）．また語りの中で幅広い場所が言及されており，多く言及されている場所には，近年なんらかの大きな変化が起こっているという共通点があった（4 章(2)）．さらに，発言の対象や内容の構成比は，主体ごとに多様である一方でいくつかの類型に分けることができ，語りの展開においてベースとなるような発言の種類が類型ごとに存在することがわかった（4 章(3)）．

それらの分析をもとに，語りの構造を図化した．これをもとに，a) クラスターごとに語りのベースになっている発言の種類があり，それらは新たな認識を生む重要なきっかけになっていること，b) 発言は予定調和的でなく，創発的なプロセスを経て生成されていること，c) 主体は，対象や内容について拡大・縮小や具体化・抽象化を繰り返しながら発言を生成していることの 3 点が解釈できた（5 章）．

(2) 考察と今後の展望

今回の実験で用いた 3 時点の連続立面写真の有用性については，時点間の変化についての発言や，視点を引いて見た町並み全体への発言など，3 時点の連続立面写真の影響によるものと推測できる発言はいくつか確認されたものの，同条件で他の触媒を用いた，あるいは何も用いなかった実験を行っていないため，今後議論の余地がある．

また，まちを語ることが主体において内面化されていた経験・知識・印象といった価値を再認識し，同時に日々何気なく接するモノや空間，他者や自身を客体化する契機となっているのならば，まちを語るという行為そのもの，あるいは語りを生み出す町並みの重要性には議論の価値があると考えられる．

＜補注＞

[1] 4 章以降の分析では，発言の対象が「D 実験・実験者」に分類された 47 件を除外して行った．

[2] 媒介中心性は，ネットワーク内でどれだけハブの役割を果たしているかの指標である．

＜参考文献＞

1) 内山久雄監修・佐々木葉著：ゼロから学ぶ土木の基本 景観とデザイン，オーム社，2015

2) 窪田亜矢：水郷の商都・佐原における「記憶の枠組み」についての研究―「歴史的なもの」との関係をふまえた考察―，日本建築学会計画系論文集，第 79 巻，第 705 号，pp.2443-2452，2014

3) 中内和・山田圭二郎・高橋利之・川崎雅史：下北沢における景観体験・思いの意味に関する研究―主体間の差異に着目して―，土木学会論文集 D3，Vol.74，No.2，pp.152-164，2018

4) 佐々木葉：まちにいる・まちにひらく郡上八幡 saoco lab.の 120 日，景観・デザイン研究講演集，No.18，pp.350-357，2022

5) 例えば，大石洋之・村川三郎・西名大作：選好景観に対する被験者の心理的評価に関する分析，日本建築学会環境系論文集第 618 号，pp.101-108，2007

6) 萩下敬雄・山田圭二郎・中村良夫：景観認識における意識の連関と生成に関する基礎的研究，土木計画学研究・論文集，No.17，pp541-546，2000

7) 尾野薫・星野裕司・増山晃太：都市空間において記憶された経験を捉えるための一試論，土木学会論文集 D1，Vol.71，No.1，pp.133-150，2015

8) 呉宜児：語りから見る原風景 語りの種類と語りタイプ，発達心理学研究，第 11 巻，第 2 号，pp.132-145，2000

9) 増田大夢：街並みの変遷と住民の場所の記憶に関する研究―長野県宮田村宮田宿区域を対象として―，早稲田大学卒業論文，2018

10) 郡上市：住民基本台帳，2022 年 11 月 1 日現在

11) 郡上市：八幡都市計画マスタープラン（第 2 期），2021

12) 家田雅之：郡上八幡における町並みを構成するファサードの特徴と変化，早稲田大学修士論文，2022